

脳性まひで知的障害のある小学3年生の児童に対して、具体的な操作や視覚的な教具を活用した実践事例

1. 事例の概要

本事例は、B 小学校特別支援学級に在籍する知的障害を併せ有する脳性まひのA児（3年）を対象として行った合理的配慮の事例である。A児は、音声言語だけでは学習や活動の手順を理解することが難しい。A児が、学習や活動に見通しをもち、進んで学習に取り組みながら、「わかる・できる」楽しさを実感し、自分に自信をもつことができるようにするために、算数の学習において教材の視覚化を中心に支援を行った。

具体的には、活動の手順を示した板書、10までの数を正しく数えて大小比較することができるような教具の開発、問われている内容を把握することができるように構造化した学習プリントの作成である。これらの点から支援を行った結果、A児は活動に見通しをもち、主体的に活動しながら10までの数の大小比較を正確に行うことができるようになった。

キーワード 脳性まひ、知的障害、算数、大小比較、視覚化

2. 児童の実態

A児は、知的障害を併せ有する脳性まひの小学校3年生の児童である。言葉の理解の遅れや発語、ひらがなの読み書きの難しさ、発音の不明瞭さなどが見られる。また、数唱については、10までの数を数えたり、読んだりすることができるが、10を越える数については、数えることと読み取ることのどちらにも困難さが見られる。

自分でしようとする意欲はあるが、着替えの際のボタンの付け外しなど細かい手指の動きが必要となる作業については時間を要し、支援が必要である。

コミュニケーションに関しては、積極的に友達に話しかけたり、覚えたことや家庭での出来事などを教員に話したりして、他者と関わりをもとうとするが、自分の気持ちを言葉でうまく表現して伝えることができないことも多くあり、このようなときは怒り出したり、泣き出したりすることもある。また、集中力を持続することが難しいこともあるが、自分がすべきことを簡単な言葉を使って手順化して示すなどすれば、学習や活動に見通しをもって取り組むことができる。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B 小学校特別支援教育部で作成したカリキュラムや独自の指導内容表をもとに、一人一人の発達段階等に応じた学習内容の選定を行っている。【基礎1】
- 特別支援学級では、各教科等の特質をふまえた専門的な指導を行うことができるように、特別支援教育部教員の教科担任制による指導体制をとっている。【基礎2】
- B 小学校では、各教科等を指導する教員が児童の実態に合った教材・教具を自作している。各教科等の指導内容をもとに教材・教具を考案し、教材開発の視点や実際に作成した教具の有効性を職員間で協議・検討している。【基礎4】

- 心理学や行動分析学を専門とする合理的配慮協力員を1名、特別支援学級に配置している。【基礎6】
- 各教科等の各題材においては、指導内容を5段階に分けた指導内容表をもとに、一人一人の児童がどの段階まで学習内容を習得できているのかを担当教科の職員が判別し、個に応じた指導を行うことができるようにしている。【基礎7】

4. 合意形成のプロセス

A児の保護者よりA児の支援に関する申出があった。その内容としては、小学校を卒業するまでに基本的な文字の読み書き（ひらがな、カタカナ、簡単な漢字）、数唱や簡単な計算（たし算、ひき算）ができるようになってほしいというものである。この申出を受けて、B小学校特別支援教育部において指導内容を適切に設定し、重点を置く事項や支援の在り方を繰り返し検討した。その中で、特にA児に対しては、具体的操作のある活動を取り入れること、視覚化して指示をわかりやすくすること、課題意識を持続させる教材を使うことなどが挙げられた。

5. 合理的配慮の実践

- 算数の指導において、活動グループや活動の手順を学習の導入段階で説明し、活動を短い言葉で示した写真付きのカードを、活動の手順に沿って黒板に貼った（写真1）。【合理①-1-1】
- A児が問題をとらえやすいようにイラストのある学習プリント（写真2）を自作し、ドングリのイラストを数える活動を行わせた。【合理①-2-1】
- 実物のドングリを、パネルをくり抜いた数え箱に入れることで、視覚的に数の大小をとらえることができるようにした（写真2）。【合理①-2-1】
- 自分がどのくらい正しく解答することができたかが視覚的にわかるようにした。【合理①-2-3】
- 教科担任制を生かし、教員間で常に情報を共有し、指導の行い方等を検討した。【合理②-2】

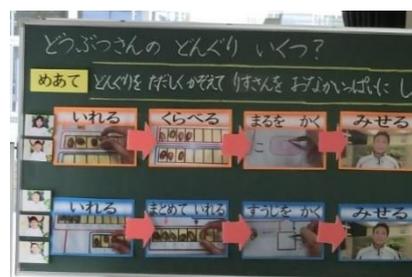


写真1 手順を示した板書



写真2 イラスト付きの学習プリントと教具

6. 本事例の成果と課題

A児にとって分かりやすい具体的操作を伴う活動の設定と視覚化された資料が有効であった。A児にとってどのような活動を、どのような順序で、どのように行えばよいのかといった見通しを具体的にもたせることが、A児の主体性を引き出し、達成感を感じさせることにつながった。合理的配慮協力員の専門的な視点からの助言が、A児の指導や支援を検討、実施する際に有効であった。